

塩

新潟大学准教授 佐藤貴保

中央ユーラシアでの製塩 塩は元来、海水から生まれるものであるが、海の無い中央ユーラシアにも古くから各所に塩の産地が存在している。

中央ユーラシアの大部分は、1～2億年前には海であったといわれている。やがて地殻変動により海水は陸地に閉じ込められ、塩湖を形成した。内陸ゆえに降水が極めて少なく、蒸発量の大きな地域であるため、塩湖の水が蒸発して塩だけが残り、土砂に埋もれ長い年月をかけて岩塩を形成した。また、土中の塩分が地下水に溶け出し、地表に現れて塩湖を形成することもある。『新詳高等地図』で調べると、中央ユーラシアにはカスピ海やアラル海のほか、チベットやモンゴリア（現在のモンゴル国と中国の内モンゴル自治区）にも塩湖や塩分を含む湿地が点在していることがわかる。地図上には現れない小規模なものも含めれば、「塩資源」は豊富といえる。

電気透析による製塩が行われていなかった時代、海水や塩湖から塩を採り出すには天日や風で乾燥させたり、煮沸したりする手間を要し、天候にも左右された。四方を海に囲まれた日本ですら、高湿多雨な気候のため製塩には不向きな土地とされている。古来華北の主要な塩の産地であった塩湖一解池（山西省）でも、南風の吹く夏～秋にしか塩の結晶が採れなかったという。一方の中央ユーラシアは、前述の通り極めて乾燥した気候で、蒸発量も大きい。このため、塩湖から手間をかけずに、比較的低いコストで塩を得ることができた。

タングート人の塩貿易 このように、あまり生産コストのかからない中央ユーラシア産の塩のうち、寧夏・モンゴリア産のものが中国内地に運ばれることが近代以前にもあった。その一例として、タングート人による塩貿易をあげたい。

タングート人は、唐代に吐蕃の圧迫を受けて、

現在の中国青海省南部・四川省北西部付近から北東へ移動し、唐は彼らをおもに陝西省北部・寧夏・オルドス地方に住ませた。彼らの一部は黄巢の乱の鎮圧に活躍し、部族長の拓跋思恭は唐からその功績を認められて定難軍節度使に任命され、皇帝と同じ李の姓を賜った（西夏の皇帝が李姓を名乗るのはここに由来する）。支配地域には塩湖が多数あり、青白塩と呼ばれる塩が豊富に採れた。唐では758年以来塩の専売制を実施しており、中国内地の解池産の塩（解塩）を流通させる方が都合がよいのであるが、青白塩は解塩より安価かつ良質であるとして評価が高く、おもに陝西地方に輸出され、タングート人の重要な収入源となった。

10世紀後半に登場した北宋は、各地にいる節度使の権限を奪おうとし、その手はタングート人にも及んだ。時の定難軍節度使は恭順したが、その一族の李繼遷は従わず、982年、北宋に反旗を翻した。北宋側は反乱勢力に対する経済的封じ込めと、陝西地方における解塩の専売を強化して税収を増やすため、青白塩の輸入を禁じた。

西夏の独立 しかし、北宋の青白塩禁輸策は、それまで反乱に与していなかった他のタングート人の収入源をも奪うことにもなったため反感を買い、かえって反乱勢力側につくものが続々と現れた。結果として北宋は反乱を鎮定できず、やがて反乱勢力は東西交通の要路である河西回廊（甘肅省西部）へ進出、1038年には李繼遷の孫の李元昊が北宋皇帝に対し「大夏皇帝」を自称するに至ったのである（一般に、この事件が西夏の独立・建国とみなされている）。このように、西夏の独立が成功した背景には、北宋との塩貿易をめぐる事情も存在したのである。

その後、北宋・西夏が慶暦の和約（1044年）を締結する際の外交交渉において、西夏側は青白塩の禁輸を解除するよう強く要求したが、専売制の崩壊を恐れる北宋側は受け入れなかった。以後、西夏の輸出商品は畜類・畜産品や薬草、そして河西回廊を掌握したことによって得られた西方からの奢侈品が中心となっていった。